

【コラム】

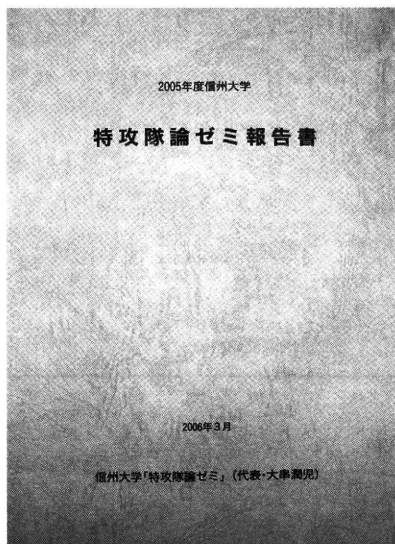
「特攻隊論ゼミ」を終えて、 あらためて安曇野地域の平和文化を考える。

大串 潤児

2005年度、旧穂高町よりの「地域振興に貢献する研究活動推進」についての交付金を受け、05年度信州大学共通教育（現在、全学教育）の授業「特攻隊論ゼミ」を基盤とした活動の成果がまとまった。ほとんど手作りのもので、いくぶんか荒削りの感があるけれども、授業期間4～7月、聞き取りや原稿手直しをふくめておよそ一年にわたるゼミナールの成果は、『特攻隊論ゼミ報告書』として発行されている。

ある松本市民の提案により特攻隊について、学生たちと考える場所を作ろうという構想がスタートしたのは、2004年4月。旧穂高町在住の地域史家で、上原良司研究の名著『あゝ祖国よ恋人よ』の著者・中島博昭さんと連絡をとり、さらに良司のご遺族、上原清子さんと話し合いが進んで、今回のゼミナールおよび上原清子さんとの「集い」（2005年8月4日）が実現した。

本報告書は、全部で4部から成っている。「まえがき」「あとがき」「『特攻隊論ゼミ』および関係事項に関する記録」の他若干の部



分を除いて、全て学生たちの執筆による。第Ⅰ部は、特攻隊やその背景となった「戦争」の概要、直接私たちが向き合うことになった「上原良司」という人物についての概説。第Ⅱ部は、2005年4月、学生たちが初めて出会った上原良司「所感」についての感想文。私たちの一つの原点として収録した。第Ⅲ部は、2005年8月4日に行われた「上原清子さんを囲んでの集い」のほぼそのままの記録、そして第Ⅳ部は、学生たち自身が問題を設定し、記した最終レポートである。

まだ拙い文章ではあるけれども、学生たちの問題意識はするどく、特攻隊や上原良司を考える重要な論点をいくつか提供してくれた。第一に、安曇野・穂高地域における自由民権運動以来の地域文化のありかた、第二に、特攻隊はどのように報道され、社会の側はそれをどのように受け止めていたのか、第三に、諸外国・諸地域での「特攻隊」についての扱いと今後の歴史教育におけるとりあげ方、などがその主要なものである。

この企画は、そもそも「近現代穂高地域における地域文化と平和文化」に関する調査・研究の一環として構想されていた。「上原良司」という「特攻隊」、あるいは『きけわだつみのこえ』・戦没学徒の社会史にとって象徴的な人物を、地域社会のなかに置いてみた時に、どのような問題の広がりが見えてくるのか。いずれも構想、ないし思いつきの段階を出ないけれどもいくつかの論点を指摘してみたい。

第一に、安曇野地域における戦時体制の社会史を分析する必要があることである。「上原良司」をはじめとする「兵士」たちを、近現代のこの地域の人びとはどのような眼差しで見ていたのか、そして、どのように彼らを支えたのか。戦争協力への「痛覚」、あるいは戦争を厭う思いが、「上原良司」という形象を得て、戦後、この地域の人びとのなかにどのような思想と文化を育てていったのか？

第二に、上の点をもう少し具体的に展開すると、以下の諸点が浮か

び上がる。①戦後に展開した多様な平和運動とそこに象徴・表現された地域住民の意識のありようを考えること、特に有明演習地化反対運動の具体的、それも民衆レベルからの分析を行うこと。②『きけわだつみのこえ』は、出版されると同時に映画にもなり、また大学生・高校生を中心として各地域に「わだつみ会」が結成される。例えば、長野県では、信州大学教育学部の「わだつみ会」を中心にしたサークル「北信わだつみ会」があったが、そのよびかけで1953（昭和28）年4月5日、長野県青年学生平和会議が松本で開かれ、信州大学文理・教育・医・繊維の各学部、深志高はじめ九高校の代表と共にわだつみ会本部・全学連・日農および東大・京大の帰郷学生が参加した、という（『わだつみのこえ』45、53・4・23）。北信わだつみ会は、『一粒の麦』という機関誌を発行しており、こうした地域における文化・サークル活動のなかで、『きけわだつみのこえ』がどのように受容され、ひいては「上原良司」がどのように地域の人びとの意識のなかで大きな存在となっていたのか、を考えること。

第三に、これは「報告書」のなかでも指摘したことであるが、安曇野の地域文化を十二分に踏まえつつも、東アジア世界のなかでの安曇野地域という発想を深めることである。先日、ゼミの学生を伴って韓国に合宿に行ってきたけれども、韓国の歴史学にあっても「特攻隊」への関心は高まりつつある。姜徳相『朝鮮人学徒出陣』（岩波書店、1997）を先駆的かつ本格的な研究として私たちは持っているけれども、特攻隊員・学徒出陣と「朝鮮人」の問題はいまだに分析されていない。上原良司が、日記のなかで日本の政策と将来について議論した「呉」という人物の存在もさることながら、近年出版された日・中・韓歴史教育の共通教材『未来をひらく歴史』のなかでは上原の「所感」が大きく紹介されている。安曇野の地域文化は、現在、東アジアに向かってなにかしらの問題を提起しつつある現状だと思う。

いずれも、「課題」というに過ぎないが、今後とも、安曇野地域を対象に、「近現代の地域文化と平和文化」を考えるための素材を発掘・調査・分析していきたい。同時に、清沢冽の研究にしても、上原良司の研究にしても、在野の歴史家のすぐれた調査・研究が前提になっていて、こうした市民の方々が提出される問題群と、アカデミズムの側が出す問題群と、豊かな対話をみのらせていきたいと思う。

(おおぐし・じゅんじ／信州大学人文学部助教授)